

2. 教養学部の方法 —— 知らないことだけが役に立つ

ひとまず4年は誰にも平等です。どうか寸暇を惜しんでいただけますよう ——

入学年度の『シラバス』において、私は挨拶をそう閉じました。せっかく3年を経たので、少しばかりさらってみましょうか。

入学の年、初めての履修登録です。教養教育科目と学科専門科目、あるいは必修科目と自由科目等々、耳では聞いていても、具体的な作業となると勝手が違ったことでしょう。他学部他学科と異なり、教養学部全4学科は揃って第二外国語を必修科目としています。これは語学の修得を目標とするに止まらず、他分野や異文化への関心を涵養してほしいためでもあります。英語は有力ではあっても万能でないし、大学生に特有な自分探しも母語の外へ出る旅ほど簡便な方法はないと思うのですが、如何でしょう（AIのもたらす達成感ないし幸福感とは少し違いますよね）。



教養学部長

塚本 信也

2年次、キャンパスが泉から五橋へ移ります。大学生活に慣れる2年めはたださえ学修のモチベーション維持に苦勞する年度であれば、皆さんには少し落ち着かない時期になってしまったかもしれません。それでも、成長した皆さんは『シラバス』がかなり“読める”ようになっていたはずで、学科の専門性が前面に出て来て、ワクワク感が増す人もいる半面、脳裏に描いていた大学像とのズレに違和を感じる人もいたでしょう、「こんなはずではなかった」と。でも、教養学部生としては「こんなはずではないからこそ、世界は面白い」とうそぶいてほしい。そこがリベラル・アーツの真骨頂、ふところの広さ深さであり、今、レジリエンス（困難を跳ね返す力）と脚光を浴びているものともきれいに重なってきます。

3年め、「演習」（通称：ゼミ）が始まりました。有り体にいえば、専門教育が本格化したわけですが、ゼミが学科専門科目ではなく、学部共通科目に配置されている点にはお気づきでしたか。専門性が高く、少人数で運営されるにも関わらず、選択肢は必ずしも所属学科とイコールではない。皆さんには、面識のない他学科教員の研究室さえノックしてもらいました。これは自分の専門が社会の中で如何なる意味を担っているのか、自分と専門の異なる人が如何に思考するのか等々、多様性や多層性、学際性を少しでも意識してほしいがためです。どうぞポジティブにそしてアクティブに躊躇また逡巡してください。

さて、4年め、いよいよ最終学年です。学修の中心は、やはり卒業研究になりましょう。教員の数だけ開かれたゼミ群は新たなテーマのもと、チームとして生まれ変わりました。チームテーマは千差万別にして多種多様、それは我々の扱う対象や方法が一つには括れないことを、問いの編み方や答えの絞り方が一つに限らないことを物語っています。卒業研究に様々な賞を設けてあるのも、皆さんの多彩なスタンスを歓迎評価したいからにほかなりません。

我々はややもすると、見たいものしか見ない（見えない）、聞きたいことしか聞かない（聞こえない）姿勢を選びがちです。いやあ、それは楽ですもの。しかし、皮肉にも、実際は知らないことだけが役に立つとって過言ではありません。人が独りでは生きていけないように、学修も専門性だけではなかなか立ちゆかない。古臭い言葉を持ち出しますが、諸学は連環しており、それを自覚することが教養を育む第一歩であり、そこに教養学部生のプライドはかかっています。

本年は昭和100年にあたるのだそうです。皆さんには昭和なんぞ縁もゆかりもないとお思いかもしれませんが、生命同様時間もまた連綿と繋がっているものであれば、ここは敢えて縁起を担ぎ、再スタートを気取ってください。僕の後ろに道はできる、高名な詩人もそういつていたではありませんか。